

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年四月十六日(第六回)

(佐藤 亮照)

今春も期待通りに顔見せし残雪溶かす福寿の家族  
このはる  
暗闇にパッと輝く蛍光灯揺れ続く中安堵の溜息

炊き出しの行列つくるひとびとに惑いつつ取るわが家の夕げ

(佐藤 志亮)

雪の寺薄墨描く白と黒瞑想ふける色無き世界

(松田 昌泰)

今朝も雪遠のく春に軒下の忘れた風鈴溜息をつく

(黒沼 貞志)

しあわせの尺度を語り気付かされ比較社会に組み込まれし我  
久々の妻の不在で慣れぬ家事期待はずれのたまの独身  
雨水すぎ屋根打つ雨音微かすぎ口で伝えて妻と味わう  
お三度の休みも併せてプレゼント物にもまよる妻のよろこび  
晴れの日の友の陰膳考える娘のさずなに想いを馳せる

「東日本大震災で詠みし八首」

はじめてのブラックアウト増す恐怖さらに追いつく車のラジオ  
復帰した映像目にして言葉無し「Hell on earth」この世の地獄  
ふたたびのブラックアウト真夜中に心にゆとりか被災地想う  
懐かしきつつまじき日々よみがえり計画停電これもまた良し  
便利さも慣れてしまえば当たり前前大震災で見直す機会  
自然には敵わないよと毛沢東主義が達えど妙に納得  
天災が人災隠すこともある語り伝えてつなぐは次世代  
海外のメディアが伝える高潔さ限度もあるよとひとりつぶやく

(中村 昌平)

春風に初めて感じる杉花粉空は晴れても心は晴れず